

エペソ2章 1-10 節 「恵みによる救い」

1 A キリストの体 (1章)

1 B 神の国を受け継ぐ者

2 B いっさいを満たす方の満ちているところ

2 A 罪からの救い

1 B よみがえった者 1 - 7

2 B 神の作品 8 - 10

本文

私たちは今日、教会とは何かについて学んでいきたいと思います。すでに四月、エペソ1章 1-17 節を見ました。そして今日は2章を中心に見ていきたいと思います。

教会とは何でしょうか？一言でいえば何でしょうか？「イエス・キリストをあがめるところ」「礼拝するところ」と言ってもよいでしょう。1章では、神がキリストにあって私たちに何をしてくださったのか、そして聖霊が私たちにキリストにあってどのような働きをしてくださっているのかを知ることができました。

1 A キリストの体 (1章)

1 B 神の国を受け継ぐ者

私たちは、このように小さな集まりとして礼拝をしていますと、教会の意義も矮小化してしまう、小さくしてしまいがちです。けれども、1章では、神がキリストにあって、天にあるもの、地にあるもの的一切をキリストのうちに集める(10節)とあります。そしてその、神の国を、キリストにあって私たちが受け継ぐのだ、と教えています。このような小さな者たちである私たちに、神は、国の指導者よりも、そしてビル・ゲイツのような億万長者よりも、はるかに大きな力と富を受け継がせてくださるのです。私たちキリスト者は、神の国を受け継ぐ、神の子どもでもあります。

2 B いっさいを満たす方の満ちているところ

そして、1章 20-23 節にこう書いてあります。「神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。」やはり、教会はとてつもなく力と権威と、光栄のあるところです。イエス様がよみがえられて、

天に昇られました。その時に、すべての支配、権威、権力、主権の上に、イエス様の名を置かれました。これらの支配、権威、権力、主権というのは天使の存在です。天使の中でも、悪い、墮落した天使、悪魔や悪霊どももこれに含まれます。キリストは天にあるもの、地にあるものの一切の権威を持っておられます。

そのキリストが頭となって、そして教会はこの方が満ち満ちているところ、キリストのからだと呼ばれるぐらい、一体となっているところであるということです。こんなすごい特権と栄光は、私たちは理解できないかもしれません。それでパウロは、18 節で、「神の召しによって与えられる望みがどのように栄光に富んだものか、（・・・あなたがたが知ることができますように。）」と祈っています。

だから、教会は社交場ではありません。友達を探しにいくところではありません。ご飯を食べにくるところでもありません。そうではなく、今書かれたことを味わうために、キリストを礼拝しにすることです。私は、教会から他の教会に移ってもよいかどうか悩んでいる人には、いつも次のアドバイスをします。「自分がその教会で、キリストをはっきりと見ることができるかどうか、礼拝を心から捧げることができるかどうか、それを判断基準にして決めてください。」

2 A 罪からの救い

そして 2 章は、神の驚くべき恵みについて話しています。このような、とてつもない大きな特権と祝福の中に入っているのは、死んで神の怒りを受けるしかない罪人たちなのだ、ということです。教会生活が楽しいものになるか、そうでないかを分ける分水嶺（＝水の流れを分けるところ）は、自分がどこから来たかをしっかりと知っていることです。神の恵みを知っているかどうかにかかっています。

1 B よみがえった者 1 - 7

2:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、2:2 そのころは、それらの罪の中であってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。2:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中であって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。2:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、2:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、・・・あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。・・・2:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。2:7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜わる慈愛によって明らかにお示しになるためでした。

神の恵みは、まるでダイヤモンドのような輝きを持っています。あるいはあまりにも美しく、まぶしくなるほどの花嫁にもたとえることができるでしょう。「恵み」の元々の意味は、「一方的な好意」です。自分が何もしていないのに、神が一方的に好意を抱いてくださっている、ということです。

そしてそのダイヤモンドのような輝きを知るには、その背景が真っ黒であることを知る必要があります。私たちの人生における神の恵みの輝きを知るには、私たちの以前の生活がいかに真っ暗だったのかを知る必要があるのです。

1 節に、「あなたがたは、死んでいた者である」と書いています。みなさんの中で「北斗の拳」という漫画を読んだ方はいらっしゃるでしょうか？その主人公、ケンシロウは、闘う相手を「あちゃ、あちゃ！」と拳で突きます。相手は特にダメージを受けた様子はありません。けれども、ケンシロウはこういふのです、「お前はもう死んでいる」。その後すぐに、相手の体が内側から破裂します。生きているのに、「お前はもう死んでいる」と宣告するのです。

聖書は、人は死んでいると告げています。肉体は生きていても、罪と罪過の中で死んでいる、と言っているのです。私たちは、これに抵抗を覚えます。「いや、私には何か良いものがあるはずだ。」と自分の内に善を探すのです。そして、「自分で何とかして良くしていこう」と努力します。けれども、死んでいるから、どんな努力をしても無駄なのです。

さらに、「世の流れに従って、空中で権威を持つ支配者に従っている」とあります。この空中で権威を持つ支配者とは、悪魔のことです。「えっ、俺が悪魔に従っているって？」と怒る人がいるかもしれません。けれども、実際にそうなのです。世の流れに従うというのは、ちょうど死んだ魚が川で下に流れていくしかないのと似ています。生きた魚は流れに逆らって泳ぐことができますが、死ねばそのまま流れているのです。

イエス様を信じて、新しく生まれた人であれば、自分が世の流れに従っていただけなのを分かっていると思います。「私は本当に、意味のないもの、中身のないこと、むなしいことを大事にしてきたな。」という気持ちがあると思います。大切ではないものが最も大切であるかのように、世は教えます。それに対して何の疑問も持たずに行ってきたのではないのでしょうか？悪魔は世の神であると、聖書に書いてあります。世の流れに従うときに、実は世の神である悪魔の言いなりに従っていただけなのです。

そして、「肉の欲のままに、肉と心の望むままに生きていた」と書いてあります。私たちは、自分が自分の願うこと、望んでいることのままに行きたいと願います。法律を破って捕まることがなければ、何でも行っていいではないか、と思います。そして教会で語られる、神の命令を聞くと窮屈だと思うのです。けれども、肉や心の望むままに生きていたら、その結末は滅びです。その人の尊厳が滅びます。その人の財産がなくなります。貴い夫婦関係や、家族関係を壊します。自分の健康さえ損ないます。

そして行きつくところは、「神の怒り」です。「生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」とあります。神の裁きを受けなければいけません。

したがってこれらが、以前の私たちの姿です。以前、恵比寿での聖書の学びで、あるクリスチャンがこのようなことを言われました。「一般の人々は、自分がどのように成功できるか、という哲学の中で生きている。」罪の中で死んでいるのではなく、自分がどのようにしたら自分の願うような成功を果たすことができるかという考えで生きています。そのために、キリストの福音を聞いてもどうしても受け入れられません。なぜなら、福音は、「あなたはもう死んでいます。あなたに可能性はないのです。」という悪い知らせが出発点だからです。そして、教会に通って自分がクリスチャンになったと思っていたとしても、こうした考え、哲学の中で生きているならば、神の恵みの醍醐味は味わうことができません。

しかし、4節です。「しかし、憐れみ豊かな神は」とあります。聖書で、「しかし」という言葉が出てきたら気を付けてください。神は、はっきり対比させたいのです。前回学びましたが、私たちにとって大切なのは、初めに、「神が私たちに行ってくださいましたこと」に目を留めることです。1章において、神がキリストにあって私たちのためにしてくださいましたことが書かれていました。そして、4章で初めて、神の召しにふさわしいように歩みなさい、と私たちが主に対して行うように勧めを受けています。けれども、私たちはどうしても、「私たちが行ったから、神がそれに応答してくださる。」という考えを持っています。祈りも、讃美も、奉仕も大切です。けれども、それはあくまでも、神が私たちのために行ってくださったことの応答であり、その逆ではないのです。

神は、「憐れみ豊か」であるとあります。ここの憐れみは、旧約聖書では「真実」という言葉で使われています(例：ルツ3:10)。ヘブル語では、「ヘセド」と言います。良くしてあげる義務はないのに、それでも愛しているから親切にすることを意味します。ルツ記では、ルツがしゅうとのナオミといっしょにイスラエルに戻る義務はこれっぽっちもないのに、それでもナオミを愛しているのが、共に帰ったのです。神はそのようなヘセドに豊かな方です。

神は、罪の中に死んでいて、肉の欲望のままに生きて、神の怒りを受けるしかないのに、それでも愛されて、私たちが生かしてくださるのです。私たちが生きたいと願うならば、それは完全に神に抛っているのです。自分で自分を生かそうとするなら、必ずつまづきます。けれども、自分をキリストの前に捨てて、自分の罪のために代わりに死んでくださった、十字架につけられたイエスにただ自分の身をゆだねることによって、今度は神が自分を引き上げてくださるのです。「血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。(ヨハネ 1:13)」私たちが礼拝に集う時に、自分ではなくキリストが自分を生かすのだ、という力と確信を与えられる、ということです。

そして5節、神はキリストと共に私たちを霊的に生かして下さり、そして6節ですが、生かして下さっただけでなく、ともに天のところに座らせてくださった、とあります。先ほどの1章21節を思い出してください。イエス様はよみがえられて、あらゆる支配や、権威、権力、主権の上に、さらにすぐれた名を与えられました。それで、神の右の座に着いておられます。そのキリストのうちに、私たちはいます。キリストがおられるところに、霊的に私たちがいるのです。ですから、私たちが天のところに座らせていただいている、と言っているのです。

このような霊的位置に私たちは着いています。したがって使徒パウロのように、自分が圧倒的な勝利者であると宣言することができます。「しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ 8:37-39）」先ほど読みましたように、すべての支配、権威、権力、主権の上に、イエス様の名が置かれました。キリストにあつて私たちも、どんな悪の勢力にあつても、どんな迫害や、苦しみがあつても、キリストにある神の愛から私たちを引き離すことは決してないのです。

そして7節の言葉です。神のこのすぐれた恵みは、あとに来る世々において明らかにする、とのことですが、神の恵みを明らかにするのに、世々、すなわち永遠を必要とする、というのです。私たちが受けた救い、その恵みは、永遠を使つてもそれを明らかにするのに足りないといふパウロは言います。私は、どこかで神の恵みは知っているという、勝手な思いを抱いてしまいます。とんでもないことです。神の恵みは、どんなに経つても、どんなに深く知つたと思つても、大海の一滴のようにしか知らないのです。

2 B 神の作品 8 - 10

2:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。2:9 行ないによるものではありません。だれも誇ることはないためです。2:10 私たちは神の作品であつて、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあつて造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。

パウロは、これまで話してきたことを改めてまとめ、強調しています。それは、徹頭徹尾、救いは神の恵みに拠るのだ、ということです。神の恵みであるならば、人の行いではないのです。神がキリストにあつて一方的に行つたことであつて、人はそのことに何一つ貢献することはないし、貢献できないのです。もし、このことを深く悟つていならば、みなさんの教会生活は豊かなものになります。もし、このことを悟つていなければ、その人はクリスチャンのように教会生活を送っているのかもしれませんが、実は心の中が渇く、喜びがない、平安がない、そして神の愛が分からない、そこでなぜ教会に来ているのか分からなくなつてくる、ということになります。

そして、次に大事ななのは、神の恵みは、私たちのその後の行いにおいても恵みなのだ、ということです。行いによって救われることはありませんが、良い行いのために私たちは救われました。天国への切符をもらつたら、残りの生活はどのように過ごしてもよい、と考えていたら、その人は神の救いの意味を分かつていない、ということで、本当に救われたかどうか分かりません。

そして大事ななのは、良い行いでさえも、神によって備えられた、ということです。多くの人が、救いは神の恵みによるけれども、その後は行いによって完成させなければいけない、と思います。いいえ、間違いです。神が私た

ちに恵みを与えてくだされば、私たちには自分ではできなかったことがキリストにあってできるようになります。信仰によって、一歩踏み出す時、それは行いとして現れます。信仰には必ず行いが表れます。行いのない信仰は、死んでいます。信仰と行いは一つのパッケージに入っており、しかも信仰から入口では入り、信仰によって出ていくときに行いも伴っているのです。

その結果、教会が良い行いの実を結んでいます。私たちは神の作品と呼ばれています。これはギリシア語では、ポエマ、英語のポエムのことです。神がご自分の恵みを詩にしてみたため時に、私たちの良い行いがその美しい神の詩なのだ、ということです。

いかがでしょうか？「教会とは何か？」という質問に対して、はっきりとした答えが出たでしょうか？ここで自分に問わなければいけないことは、「自分は神の恵みに立っているかどうか」ということです。ここに表された、神の豊かな憐れみ、その偉大な愛に自分自身を置いているか、ということです。自分自身がまったく死んでいたということを知っていたかどうか、ということです。そして神はキリストにあって自分を生かしてくださること、それだけでなく、どんな悪の勢力も自分に対して無力であり、自分は天にキリストと共に着いているんだ、ということです。このことが分かれば、おのずと良い行いをしています。それが神が願われている実、ご自分の作品です。